

チンギス・カンの前半生 その9

－オン・カンを敗る－

Former half-life of Chinggis Qan No.9

－Temujin Defeat Ong Qan－

2020年9月22日

Sep.22,2020

安田公男

Kimio Yasuda

URL : chinggis-ff

はじめに

少年期に父を喪い困難は色々あったが、テムジンも順調に成長して、モンゴル部族の半分ではあったがキヤト氏族を束ねるカンとなり、亡き父親が成し遂げられなかったことを実現させた。オン・カンと共同してブイルク・カンのナイマン部族を劫掠した後、タイチュート氏族を併呑して、モンゴル部族統一を成し遂げた。次いでタタル部族を制圧し、クイテンでメルキトとブイルク・カンのナイマン連合軍にも打ち勝った。残るはタヤン・カンのナイマン部族のみとなった時、若い頃からテムジンに対立していたジャムカの使囃によりオン・カンとの争いが起きた。テムジンは苦しい逃亡生活を続けながら再起の道を探し、遂にオン・カンを倒す。チンギス・カンとなる道がここに開けた。

1. 史書の比較

各史書は内容が異なっている部分もあるが、全てを引用すると分量が多すぎるので、秘史を引用し、他書との違いは考察で述べる。

1. 1 元朝秘史

番号	記事内容(抄)
1	クイテンの戦いの後、テムジンは長子ジュチにオン・カンの娘チャウルベキを求めた。娘のコアジンベキをセングンの子トサカに与えようとした。だが、セングンは尊大に思い断った。
2	この話をジャムカは聞いて、1203年の春、アルタン、クチャル等と協議し、ジェジェル丘の北のベルケ・エレドに居たイラカに赴き言った。「テムジンはナイマン国のタヤン・カンと話が通じています。先にやっつけないと、不利である。兵を用いるなら私も助けよう」。イラカはこれを信じて大いに喜び、サイカン・トデエンをオン・カンに使者として立て、以上の言葉をオン・カンに伝えた。オン・カンは、「今までテムジンに世話になっておきながら、悪く言うなら天に慈しまれまい。ジャムカは口が巧く信じられない人物だ。聞くに足りない」。イラカは、「信用ある人間も言っているのだから信じるべきだ」と、何度も言ったが効き目がない。最後に自ら父の元に出かけて強く迫った。だが、なおもオン・カンは、「テムジンを見捨てることは出来ない」と言った。セングンは怒って家を飛び出した。オン・カンはわが子を哀れんで、「我が子を見捨てることは出来ない。おまえが良いと思うならやれ」と言った。
3	セングムは、使者を寄越して、「婚姻の話に今同意する。内祝いの酒を飲みに来るように」と告げた。テムジンは10騎を率いて向かった。途中でムンリクの家泊まったが、ムンリクは、「この話には裏があります。今は馬が痩せているので後にしたいとでも言っておいた方が宜しい」と言った。代理の二人を行かせ、テムジンは帰った。セングムは悟られたと思い、直ぐに攻めることを相談した。
4	アルタンの従弟のイェケ・チェレンは自宅に帰って、「明日テムジンを探らえようと相談してきたが、これをテムジンに告げに行く人がいれば、どれほど恩賞を受けるだろうか」と言った。妻のアラクイトは、「あなたのでたらめな言葉を従者が聞いたら本当と思うでしょう」と言った。話を聞いた馬飼のバダイは同役のキシリクに告げた。キシリクは話を確認しに家に行った。その時、チェレンの息子ナリン・ケエンが外で鍬を研ぎながら怒ったように、「我らは何を相談したのか。秘密を漏らした者は舌を裂かれてしまうぞ。だが、漏れた以上口を止めることは出来ない」。彼はバダイとキシリクに、直ぐに出発してテムジンに知らせるように言った。二人はメルキトの馬にまたがり、夜到着して、企てを伝えた。テムジンは夜の内に近くの者に知らせ、身軽な格好で逃げ出した。

5	マウが丘の北麓を、ジェルメを殿軍にして移動した。翌日の午後、日が傾いて来た頃カラ・カルジト砂漠に到着した。その時敵軍が、マウが丘の南を通り、赤い榆林を経てやって来るのを認めた。(オン・カンが指揮権をジャムカに譲る話と、それをテムジンに知らせたとの内容を挟む) テムジンはウルウト、マングト勢を先鋒に、ケレイトと戦った。突進してきたセンゲンに傷つけたが、日暮れとなり双方陣を引いた。
6	夜が明けると、オコデイ、ボロクル、ボオルチュがいなかったが、間もなく戻ってきた。敵陣は引き返したので、テムジン軍も移動し、ウルクイ、シルケルジト河を遡り、ダラン・ネムルゲスに入って行った。カルカ河を降って動くとき、2600の軍兵がいた。マングトのクイルダルが亡くなったのでカルカ河のオルヌ山の半崖に葬った。カルカ河がブイル湖に注ぐところにオンギラトの一派がいたので味方にした。
7	トンゲ小河の東に下営し、使者を二人立ててオン・カンを次のように詰問した。内容は、1:父がオン・カンの叔父グル・カンを追って、あなたを復位させた。2:あなたが西に逃げた後窮迫して帰って来た時、グセウル湖で会い、諸部から家畜を徴収して差し上げました。メルキトを攻めて、獲られた財貨を全て捧げました。飢えたままで、半月も過ぎさせなかった。3:ナイマンのブイルク・カンを攻めたとき、あなたはコクセ・サブラクに襲われました。私は四将を派遣して救った。以上のような功績があるのに、なぜ私を憎むのか。理由を聞かせよ。また、ジャムカとアルタン、クチャルにも詰問使を送った。センゲンにも送った。
8	テムジンは進んでバルジュナ湖に下営した。コルラス部を味方にした。アサンというサルタク人がエルグネ河の下手で毛皮を買おうと、羊千匹とやって来た。弟のカサルが妻子をオン・カンの元に置いたまま、やっとのことでたどり着いた。カサルのオン・カン陣営に復帰したい旨を伝える使者を出し、テムジンらはケルレン河のアルカル・ゲウギの地に進んだ。使者は帰ってきて、オン・カン陣営が無防備なことを報告したので、テムジンは夜行し、ジェジェル丘のジェル狭間にいたオン・カンを取り囲み、三日間攻めて下した。だが、オン・カンとセンゲンは逃げた。
9	ケレイト部族を降伏させた。オン・カンの弟ジャア・ガンボの娘を、自分と、息子トルイが娶った。ケレイト部族を分配して、その冬、アブジア・コデグりに冬営した。
10	オン・カンとセンゲンは逃れて、ディディク・サカルのネクン水に至った。そこでオン・カンはナイマンの辺将コリ・スベチに捕らえられて殺された。センゲンはネクン水に行かず父と別れ、別の方向に進んだ。

2. 考察

2.1 クイテンの戦い後のテムジンの移動先

親征録と集史には、アブジア・コデグりで冬を過ごしたとある。秘史と元史には記載が無い。

この場所は既に述べたように、後のケルレン河の大オールド、現在のアウラガ遺跡である。親征録のように、クイテン即ち現在のモンゴル北部、ダルハンで勝利した後、ケレイト陣営とアラン塞で祝勝会をしてから本拠地に帰ったのである。但し集史ではアブジア・コデゲリは今の大興安嶺山脈付近にあって、オン・カンと共に冬営したとある。これは、クイテンの戦いをモンゴリア東部でのことと誤解したことによる。

2.2. 結婚話

冬、テムジンに長子ジュチに、オン・カンの娘チャウルベキを求め、娘コアジンベキをセングンの子のトサカにやろうとしたが、尊大に構えたセングンの反対でまとまらなかった。

筆者はジョチを1181年生まれと推測しているため、1202年の冬の時点で22歳である。彼の正夫人はオン・カンの弟ジャア・ガンボの娘ベクトウミシュ・フジンである。当時の風習と、テムジンとジャア・ガンボの親密さからして、子が幼い頃に親同士で決め、数年前に結婚させていたはずである。ケレイト陣営からしたら、チャウルベキまで彼に与えると、王室の姫を全部テムジンの息子の一人に捧げているような気分になる。テムジンは厚かましい、というような評価にもなるだろう。コアジンベキは、もう少し別の方面との関係を強めるための結婚にしたい、との思いが働いたとしても不思議では無い。セングンのテムジンへの対抗心は非常に強いことがこの後はっきりするので、トサカとコアジンベキとの話がまとまらなかったのは当然のように思われる。いずれにせよ、破談になったからと言って、相互の不信感が格別に増したとは思えない。

2.3 ジェジェル丘の山陰のベルケ・エレット

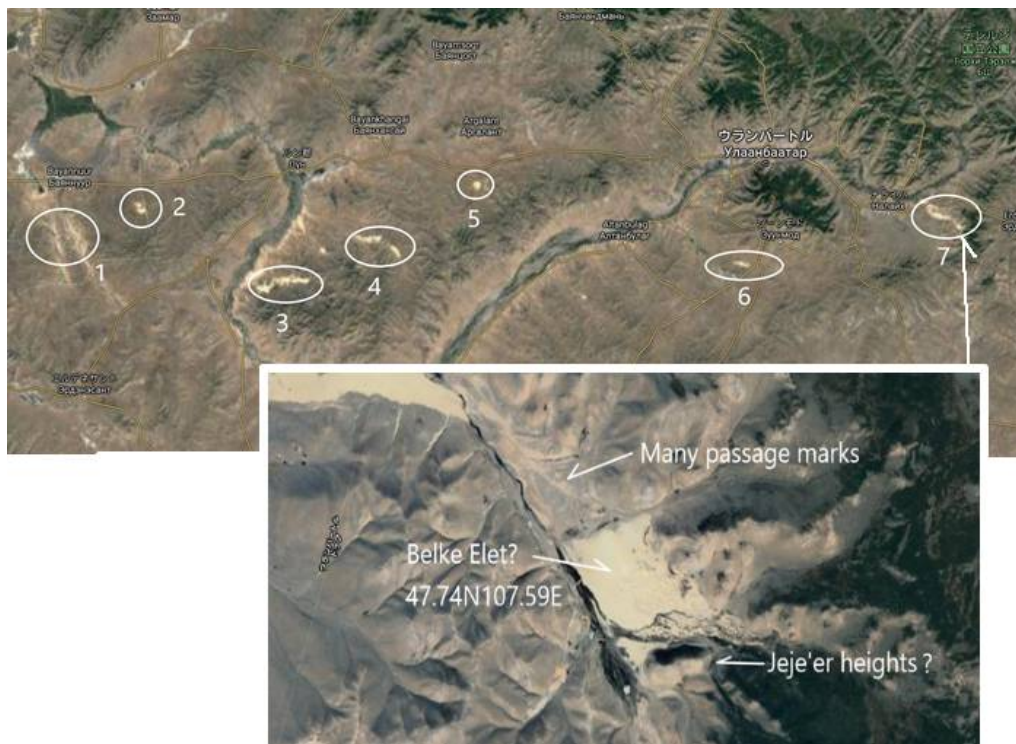
1203年の春、以上の結婚話がまとまらず、テムジンががっかりした、との情報をジャムカは知って、両者の間に隙間風が吹いていると判断した。そして、彼はセングンに、「テムジンはナイマンに通じているから今のうちに排除すべきだ」と焚き付けた。この話にテムジンの親族であるアルタン、クチャル、ダリダイらも乗ってきた。彼らは、春に行われていたウルクイ・シルケルジト地方でのタタルとの戦いで、軍令違反を咎められていたことを恨みに思っていたのだ。この時セングンはジェジェル丘の山陰のベルケ・エレットにいた。親征録は、この時オン・カンがベリケ・サダにおり、集史ではセングンはエレット地方に居たとする。元史は情報がない。

ジャムカはクイテンの戦いでは敵陣営と連盟していたが、戦場に到着する前に味方が敗れたので、オン・カン陣営に投降していたのであろう。オン・カンはテムジンと一緒に少年時代の彼の面倒を見ていたので、その顔で受け入れられたと思われる。彼はグル・カンになった時もテムジンに敗れていたし、若い頃もテムジンに戦いを仕掛けたことが原因でキヤト氏族の土地に居られなくなっていた。モンゴル部族の中の弱小氏族に属するジャムカにとって、家柄が良くてカンにもなっているテムジンは嫉妬の対象であったのだろう。

セングンがいた場所は、秘史のようにベルケ・エレットだろう。父親のオン・カンは、秘史の通り、かなり離れたところにいたとしたい。エレットは沙陀と訳され、砂の丘のことである。この地は後にテムジンがオン・カンとセングンに奇襲を掛ける場所にもなるので、位置を是非押さえておく必要

がある。砂漠性の土地を、トーラ河のアラル（島）付近から、テムジン領域となるサーリ・ケール近くまで見ていった。7つほどの荒蕪地と思われる場所があった（図1）。1から5までは地面が波打っており居住に向いていないように見える。付近の通行痕も少なく、人が利用していた形跡がない。6は新空港であり、元からの砂地であったとしても、周囲に山はあっても丘らしいのがない。唯一、7の土地の、南東方向の隅 47.74N107.59E 地点がそれらしく思われた。拡大図のように、1辺の長さ 1.7km ほどの菱形の土地である。トーラ河に合流する小河が東から北西へと取り巻くように流れているので居住に問題はない。この川の南には独立丘があり、推定高さ 100m 前後、長さ 700～800m である。この丘をジェジェル丘と考えると、その北の砂地がベルケ・エレットとなる。北西方向には多くの通行痕があり、よく利用されていた土地であることが分かる。ここ以外にふさわしい土地がないので、セングンはここに居たと推定して、稿を進める。

図1 砂漠性の土地とベルケ・エレット候補地



一方のオン・カンの居場所については手がかりがない。仮にケレイト部族の中心地であるカラ・トンだったとすると約 75km、現在のウラン・バートル中心部で 60km ある。セングンは使者をやって父と連絡を取り合っているのだから、騎馬で1日行程になるその辺りにいたのであろう。

セングンはテムジンを捕らえる計画を父に了解して貰おうと思ったが、強く反対されて許可が下りない。最後は自身で赴き、親子喧嘩になりかけてオン・カンが折れた。

2.4 テムジン引き返す

1203年の春にセングンは、先にあった婚姻話を考え直して進めたいので、内祝いの酒を飲みに来

るようにとテムジンに告げ、来たところを捕らえる作戦を立てた。テムジンは喜んで、10人の供回りを連れてケレイト方面に向かった。集史では供回りを2人とするが、あまりにも少なく、他書にあるように10人が妥当であろう。旅の途中でコンゴタン氏のモンリクの家に宿泊すると、この話に危険な臭いがすると忠告され、自身は引き返して使者を宴席に行かせた。

この重大な方向転換が行われたモンリクの家はどこにあったのだろうか。アブジア・コデグリからケレイトに向かう経路を探ると、2つ候補地がある。1つは現在の集落バヤン・ジャルガランに直接向かう道で、距離が約70kmあり騎馬で1日行程である。2つめはケルレン河の東のツァーガン・エルギーン・ジサという場所に向かう道で約30kmの半日行程である。

図3 テムジンが向かった経路



どちらもアブジア・コデグリからの道は岩山の細い道であるので、多数の車駕が向かうと交通渋滞を起こすだろう。小人数の旅でこの道が用いられたものとする。2つの集落はどちらも小さいが通行痕は数多い。バヤン・ジャルガランは、ケルレン河に沿った行程を離れて首都方面に向かう道の入り口である。北に進むとサーリ・ケールで、北西方向への道をとるとカラ・トン方面に至る分岐点という交通の要衝のようである。だが、この集落は狭小な岩山の間には家が密集して、モンゴルらしからぬ風景であるから、昔から人が居たとは考えにくい。一方のツァーガン・エルギーン・ジサはケルレン河の側の開けた扇状地のような場所である。現在は農地が西に広がっているが、ここからケルレン河を横断する通行痕が幾本も見えるので、昔から利用されていた場所であろう。モンリクはテムジン家譜代の臣であり、巫術を司っていたコンゴタン氏の役目からして、中心地アブジア・コデグリより遠く離れたところに居住していたとは思えない。馬で半日のツァーガン・エルギーン・ジサにいた可能性が高い。テムジン旅行時の定宿であり、ケルレン河を渡る者達の動静を探ったりする役目もあったのではなかろうか。テムジン一行は昼前に家を出て、日暮れ前にモンリク宅に到着したのであろう。予定では、翌日に70km進んでサーリ・ケール宿泊、2日目に60km進んでベルケ・エレット着であっただろう。

2.5 セングン達の密議を知る

婚約の内祝いにテムジン本人が来ず使者一人がやって来た。計画の失敗を悟ったセングンたちは、襲撃を考えた。その密議に加わっていた一人にイエケ・チェレンがいた。セングン側に付いたアルタンの年下の従兄弟だったらしい。家に帰って夫人にその内容を告げ、「この話をテムジンに知らせればどれだけ恩賞がもらえるだろうか」と言った。家の外でたまたまその話を聞いたのが従者のバダイだった（キシリクとする史書もある）。イエケ・チェレンの息子も父に同調し、バダイとキシリク二人をメルキトの馬に乗せて、夜中にテムジンの元に送り出した。

バダイとキシリク二人は後に大きく賞されることになる。だが、本当に賞されなければならないのはイエケ・チェレンであろう。密議内容を他人にも聞こえるような声でしゃべったというのは、本人に秘密にしたいとの気持ちが薄かったからである。単に気が弱くて秘密を守ることが出来なかったとは考えられない。彼はアルタン陣営ではあったが、心の中ではカンであるテムジンを好ましく思っていたのだろう。メルキトの馬に使者を乗せたのは、この馬がクイテンの戦いで戦利品であったからだろう。二人は戻って来られないから、自分たちが育てた愛着のある馬には乗せず、失われてもあまり惜しくない馬に乗せたのだろう。夜中に出て夜にテムジンに報告したと秘史にあるが、この夜は何日目の夜だろうか。ベルケ・エレットとアブジア・コデグリ間は約 160km ある。馬での 1 日の最高到達距離は 150km との資料もあるから 1 日で不可能というほどの距離ではない。イエケ・チェレンはモンゴル部族なので、ベルケ・エレットよりも少し東寄りに住んでいたのではなかろうか。そうであれば更に数 10km 縮まるので、1 日で十分到達可能である。二人は馬上でゆでた子羊肉を食いながら、寝ずに丸 1 日駆けたのだろう。距離からして、翌日の夜に到着したと考えられる。ちなみに、馬がそれだけ走ることが出来るのは、競馬のような駆け足（gallop）ではなく、速歩（trot）の場合である。駆け足ではあまり長距離を走れないから、モンゴル人は速歩が長く続くような馬を好むらしい。

このように、テムジンが危機を知った経緯を無理なく推察できるので、ベルケ・エレットの想定位置は正しかったと考える。

2.6 逃げる

危機を知ったテムジンは夜の内に支度して、朝になるとアブジア・コデグリを逃げ出した。親征録ではアラン塞に置いていた輜重を移したとあるが、ケレイト領の西にあるアラン塞に輜重を置いていたはずがなく、クイテンの戦いの記事に引きずられてそう書いたのだろう。向かった先はシルケルジト河地方とされている。

テムジンは輜重即ち家族・財産と共に北に向かい、現在のジャルガルト（Jargalt）で輜重を元の本拠地であるオノン河の上流域に送り出した。輜重隊は弟のテムゲが率いていたかも知れない。そこから、テムジンは方向を変えて現在のウンドゥル・ハーン方向に向かったはずだ。ケレイト軍を引きつけて輜重隊を守るためである。ウンドゥル・ハーンでケルレン河を渡り、現バルーン・ウルトを経てウルクイ・シルケルジト河地方を目指しただろう。なぜその方向に向かったかという点、テムジン方の兵数だけならその経路の水と草で進めるが、後から来るケレイト方は人数が多いので、

水草が不足し進めないと判断したからに違いない。前年、ウルクイ・シルケルジト地方を攻略して監視部隊も若干置いていたはずなので、兵馬を休養させることも出来る利点もあった。オン・カン軍も同じコースで後を追ひ、テムジンの輜重には目もくれず、本隊を追いかけたらう。

図4 テムジン軍逃亡経路



2.7 カラ・カルジト砂漠の戦い

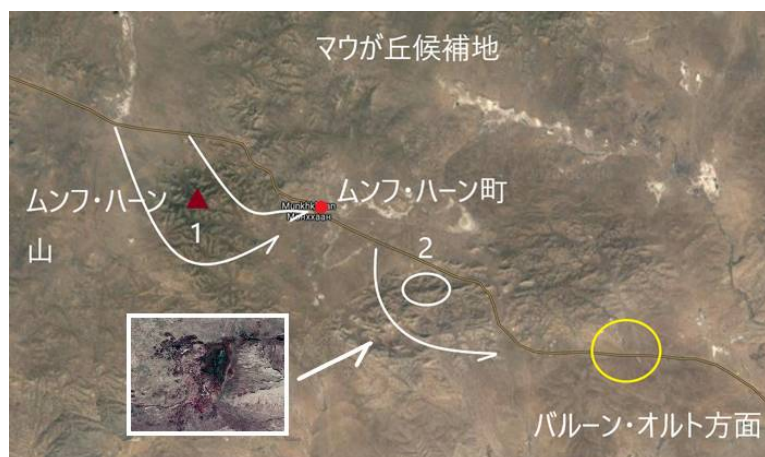
逃亡の途中、カラ・カルジト・エルトに着いてテムジン軍が一休みしていると、マウが丘の南を通り、赤い楡の林の向こうからオン・カン軍が迫って来て戦闘が始まった。マングト部のクイルダルは後に残される息子を頼み、戦死覚悟で戦う。激戦になったが、午後遅くに始まったのでまもなく日暮れが迫ってきて、戦闘はそれほど長く続かなかったようだ。セングンはナイマン侵攻作戦の折りに失敗したような前線への突出をやらかして、矢で頬を射られて怪我をする。

カラ・カルジトと呼ばれた戦場は、図4の経路のどこかにあるはずである。ウンドウル・ハーンまでは戦闘がなかったと思うので、そこからバルーン・オルトを経て、ウルクイ・シルケルジト地方に至る経路にそれらしい地域がないかを見ていった。その結果、両軍の移動を説明できるような地域が2ヶ所あった。

図5に示すように、1つはムンフ・ハーン町 46.97N112.05E の付近で、同名の山(1606m)が西にある。山北を街道が走るが、山の南を迂回する通行痕もあり、白線で示した。町は水や草が豊富そうであり、ここで一休みしていたとして不思議ではない。また山の名は、マウ・ウンドルに似せて付けられたように思えなくもない。2つ目はその町から20km程東に移動した地域である。白丸で囲んだ部分は岩の丘である。ここも、本街道を迂回して、丘の南から行く通行痕がある。

不思議なのは楡の木が赤いと表現されていることである。日本の楡は緑の落葉樹であり、春頃に赤かったとは信じにくい。本当に赤かったとすれば、楡でなく別の樹木であろう。地図を見ると、どちらの迂回路の側にも妙に赤い土地がある。季節的な植物の色によるものではなく、土地そのものが赤そうに見える。何による色かは不明であるが、上図のように、2の方の赤色が鮮やかで、周囲に木も生えている。この地面の色と合わさって赤い楡の木と表現されたのではなかろうか。

図5 マウが丘とカラ・カルジト砂漠



2 の位置までは比較的地面に緑があるが、ここから東部は緑が急に薄くなるので、黄丸で囲んだ 46.85N112.45E の辺りがカラ・カルジト砂漠ではなかろうか。これらのことから、46.90N112.25E にある岩の丘が、マウが丘であるをしたい。

クイテンの戦いで、セングンは賢くなったと判断したのだが、又要らぬ突進をしたようだ。この人物は自陣営が優勢であると調子にのって失敗し、小人数であると自重して相応の仕事はできるタイプのようなのだ。現代で言う、課長の立場までは使えるが、それ以上の部署を任すのは難しい人物だったのだろう。元史はこの戦いでテムジン方が大勝してケレイトが降伏したように書いており、他書もテムジン方優勢と書く。が、テムジンは更に逃げているので、勝っているはずがない。善戦はしたもののケレイト方の数に抗することが出来なかった、とするのが正しいだろう。ケレイト勢はここから追うと水草が得られないので引き返し、ムンフ・ハーン町付近で宿営したと思われる。数の多いケレイト勢にはここが追撃限界だったようだ。テムジン方は夜の内に更に進んで落伍者を待った。ボウルチュや怪我をした息子のオゴタイが翌日追いついてきた。

秘史はこの戦いで、オン・カンが軍の指揮権をジャムカに譲ろうとしたとし、それにあきれたジャムカが戦いの最中にテムジンにそのことを告げに行くと書かれている。血気盛んな息子がいるのに、ケレイトの武将でもないジャムカに指揮権を譲るという話は事実とは考えにくいし、戦いの最中に敵陣に行けるはずもない。テムジンに盾突き通したジャムカが、なぜ急にこの時だけテムジンの味方になるような行動をするのかも理解できない。ジャムカのことを甘く書く秘史だから、創作の可能性もある。

オン・カンはこの後どうしたのだろうか。勝ったとして本領に帰ったのか。それともケルレン河付近に滞在して、もしかしたら又ケルレン河行程に現れるかも知れないテムジン方を待ち構えていたのだろうか。その性格と息子の怪我から考えて、多分帰っただろう。

2.8 旧タタル領を目指す

テムジン軍はバルーン・オルトから南下し、7年前、金国のタタル征討隊の主将完顔襄が率いた西軍が用いた経路に沿ってウルクイ・シルケルジト地方に向かったのだろう。ここは水も食料も豊

富だし、前年味方に付けたタタル部族も居たので、しばらく休んだことだろう。そこから、ダラン・ネムルゲス、現在のタムサグ・ブラグ地方を経てハルハ河に沿って進んで行った。通行容易なケレン河沿いの道が利用できる場所に移動して、残してきた家族の安否やケレイト方の情報を集めようとしたのだろう。その時将兵を点検すると、秘史は全部で 2600 人であったとし、他書は 4600 人前後居たとする。だが、どちらが正しいのか判断できない。バルーン・オルトから南下する道の、季節ごとの馬の通行可能量が分かればよいが、そのような推定をしたデータがないし、完顔襄も何騎率いていたのか記録がない。秘史以外の書の方がテムジンの戦果を誇大に書く傾向があるので、秘史の 2600 としておきたい。

食料不足を補うために巻き狩りをしていた途中で、戦いで傷ついていたクイルダルが亡くなった。遺骸をハルハ河の側のオルヌウ山の半崖に葬ったとある。山らしい所を地図で探すと、現在のハルハ・ゴル町のあたりしかない。ここでハルハ河は南北に流れているので、テムジン隊が河の西岸を通り、ウルウト、マングト隊が河の東を進んでいたという秘史の記事が正しい。ただし、もう少し北に進むと河が東西に流れるので、テムジン隊が河の南岸を進んだという親征録の記事も一概に間違いとは言えない。

河の流れに沿って進んでいくと、河がブイル湖に注ぐ辺りにコンギラト部族の一派がいたのでその協力を取り付けた。コンギラト部族はハイラル河近辺が本領であり、ここは元々タタル族の土地であった。そこにコンギラト部族が居たと言うことは、タタル部族が居なかったことを示している。3 年前にテムジンがこのタタルを征服した時、タタルを根絶やしにしたとしか思えない。すっぱりとできた空白の土地にコンギラト部族が移動して来ていたのだろう。その土地の権利はテムジンに帰属すると言っても不思議ではないから、コンギラトも一切抵抗しなかったのだろう。

移動を続けてトンゲ小河に下営した。この小河を集史と親征録は澤と訳し、さらにそのトルカコルカ（ン）の地とする。語義がはっきりしていないので、名前から場所を決められないが、移動経路からして新巴尔虎左旗、モンゴル名アムガラン（Amgalang）の地であると判断する。後年、弟のテムゲがここに住んでいたし、今も町が大きいのは、水草が豊富な土地だからであろう。ここで逃亡の疲れをとると同時に、先ず家族の安否を確認したはずだ。

2.9 オン・カンたちを詰問

落ち着いた場所を得たテムジンは、オン・カンに詰問使を出し、今までの自分のオン・カンへの功績を語り、恩を忘れたのかと厳しく責めた。その内容は、秘史では以下の 3 項目である。

- 1：あなたが叔父グル・カンに追われた時、父があなたを助けて復位させた。
- 2：あなたが西に逃げた後窮迫して帰って来た。グセウル湖で会い、諸部から家畜を徴収して差し上げた。飢えたままで、半月も過ごさせなかった。メルキトを攻めて、獲られた財貨を全て捧げた。
- 3：ナイマンのブイルク・カンを攻めたとき、あなたはコクセ・サブラクに襲われ、輜重を全て奪われたが、私は四将を派遣して救った。

他書では2つ増える。

4：あなたが西に逃げ居場所が分からなくなったとき、キタイ近くに居たジャア・ガンボを速やかに呼び戻し、メルキトが攻めて来たので、セチュ・ベキ、タイチュと共に防いだ。

5：私は、ドルベン、タタル、カタギン、サルジュート、コンギラトを征した。獲った物は必ずあなたに分けた。

秘史以外の書に書かれている2項目は、省いて良いような内容でもないのに、なぜ秘史にないのだろうか。4は他書では詰問での2番目の項目となっている。物事が起きた順から言えばそうなる。ジャア・ガンボを呼び寄せたのは、オン・カンがカラ・キタイに行ってしまったが、乗っ取ったエルケ・カラではケレイト部族の統治が難しくなったのだろう。ケレイト部族がもしも崩壊すれば、モンゴル部族はナイマン部族とメルキト部族の脅威に直接さらされることになるので他人事ではない。どの史書にも書かれていないが、当時モンゴル部族のカンであったジョチの指示により、少年時代からジャア・ガンボと親しかったテムジンが彼の呼び寄せ役になり、ケレイト部族のとりまとめを依頼したのだろう。弱みにつけ込んでメルキトが攻めてきたので、テムジンはセチュ・ベキ、タイチュらと派遣されて、ジャア・ガンボと共にメルキトの侵入を防いだのだ。後に対立することになるセチュ・ベキ、タイチュと行動を共にしていることからして、テムジン主導とは考えられない。当時のモンゴル部族のカン、ジョチ・カンの指示であったと考えられる。ジョチ・カン本人がこの戦いの指揮をしていた可能性もある。既に述べたが、どの史書でも、弟アルタンの反逆によってジョチ・カンの存在は消されており、わずかな痕跡だけが残っている。更に、ジャア・ガンボについていえば、この後テムジンがケレイト部族を吸収する過程で大きな役割を果たしたのに違いないが、どの史書も詳しく書いていない。この後の事として簡単に触れている秘史は、それで十分としたのだろう。

ここで考えてしまうのは、ジャア・ガンボはなぜキタイ国境近くに居て、何をしていたのかということである。何の手掛かりもないが、オン・カンと気が合わず、現在のフフホトかウランチャップ辺りに行って、キタイとの貿易でもやっていたと考えておこう。

これらの詰問にオン・カンは反論できず、小指を切って血を出し、小さな器に入れてテムジンに送った。テムジンの言葉に心の痛みを感じたとの気持ちを表わしたのだろう。

オン・カン側についたアルタン、クチャルらについても使者を出して詰問した。その内容は次のようであった。「お前達がカンになれと言うから今まで私がカンとしてやって来た。私に反抗するくらいなら、お前達の誰かがカンになれば良かったのだ。オン・カンに付くのも良いが、彼は気が変わりやすく、私でさえもこの有様だ。お前達が大事にされるとは思わない。もう親族でも何でも無い。ただ、双方に何があっても、先祖の地である三河の源だけは他人に踏み入れさせるな」。ジャムカにも使者を出してなじった。以上を述べた後、それぞれに返答使を寄越すようにと言った。そして連絡場所として、集史は、「私が東に行っているならブイル湖の辺りで探せ。西に行っているなら、カバカルーカルタルカンを目指して行き、三河で探せ」と伝えたとする。同様のことを親征録はそ

れぞれ、ナルトリンフチンル（車偏に留）ウ？の源、カバラカンドルカの山にでて、クルバンプカジュス？（忽魯班不花諸思）河に沿って来い、と記す。

三河は通常オノン、ケルレン、トーラの河で、その源であるヘンティ山系を指す。テムジン、自分達が本領、即ち家族が逃げた所に帰っている場合もある、と言っているのだろう。オン・カン、アルタン等の使者を迎え入れたのがトンゲ澤なのか、旅の途中なのか不明であるが、次に述べるバルジュナ湖だったのではないかと想像する。

2.10 バルジュナ湖

テムジンはトンゲ澤を離れた。集史によれば、まもなく、コンギラト部の一派であるイキレス部人のボトがコルラス部に追われていたのを受け入れた。秘史はコルラス部を帰順させたとする。同部族が互いに争って、やはり空き地になった旧タタル領に逃げてきていたのだろうが、どちらであるのか判断するのは難しい。元史、親征録はこれをジルキン？部とするが、ケレイトの有力氏族の中の一つによく似た名があるので、信頼性に乏しいと思う。

続いて移動し、バルジュナ湖に至った。集史によれば 1203 年夏のことである。ここで、いくつかのことがあった。

一つは、秘史だけの情報であるが、オングト部の商人アサン（ハッサン）が、エルグネ河で毛皮を仕入れようと、ラクダに乗り羊千頭と共にやって来たのに会ったことである。オングト部はトルコ系で、本拠地はウランチャップ付近だった。そこからエルグネ方面への行程を考えると、現在のサインシャンド、バルーン・ウルト、チョイバルサンを経て、コレン湖の南へ至る経路ではなかっただろうか。彼から道中の情報を得て大いに参考になったはずだ。

二つ目は、カサルがオン・カンの元から離れて、幼子を抱えてやつの事で兄の元にたどり着いたことだ。彼はダラン・ネムルゲスで、帰順の意思を持ったコンギラト部を追い返す失敗をしていた。その失敗を兄に咎められて離反し、オン・カンの元に居たようだ。だが、兄を見捨てられずに単騎追いかけてきたのだ。幼子を連れていたとあるのは、兄の元に向かうことを悟られないためだっただろう。それから考えても、ケレイト本領からはるばるやって来たとは思えない。ケルレン河辺りに展開していたケレイト軍の一員として居た時に脱出したと想像する。その時滞在していたのは多分アブジア・コデゲリで、兄が居なくなった後にカサルがいたのではなかろうか。

三つ目はバルジュナ湖の誓いとして知られているものがある。テムジンは、この湖の苦い水を部下たちと飲んで、艱難を乗り越え再起を誓ったと言う。後年その部下達は大きく賞賛されることになる。この記事は秘史にない。他書によれば、この時の部下は多くても 20 名を越えなかったらしい。ただし、それがこの時のテムジン勢の全てではない。少なく見積もっても 2,600 を越える軍兵を率いての帰還だから、たまたま近くに居合わせた信頼する部下達とテムジンが会話する中で起きた事であろう。ここからコレン湖の西を北上し、旧タイチュート領を経て、オノン河上流域のキヤト氏族の本領に帰ったのだろう。

バルジュナ湖の位置であるが、色々な事がここで起きているからには、単に街道の途中にあった場所ではなく、旅をする者の誰もが目指す、街道の中継点的な位置だったのではなかろうか。次に

起きるカランジ砂漠の戦いを考えると、敵はケルレン河の南沿いにやって来たはずである。それを迎え撃つ為に停止したとすれば、湖もケルレン河の南にあったはずだ。トンゲ澤からやって来て、現新巴尔虎右旗の対岸辺りに留まったと考えると、48.63N116.85E 付近の小さな湖の群がバルジュナ湖に比定される。巴潤薩賓（バルンサビン）ノールという名のよく似た湖が 48.78N116.90E にあるが、以上の条件を考えると合致していないように思う。

図6 バルジュナ湖



2.11 カランジン砂漠の戦い

バルジュナ湖に達した後、元史、親征録では再びオン・カンが攻めて来たので、カランジ（合蘭真）砂漠で戦い、テムジンが大勝したとなっている。そして戦いの後、アルタン、クチャル、ジャムカが、ジカンクル？にいたオン・カンを殺そうとしたが、計画が洩れて彼らはナイマンのタヤン・カンの元に逃げ、ダリダイは土下座してテムジンに降伏したとある。集史はこの戦いを、カラアジン・エレルと書き、オン・カンがキトクルカトエレット？に来た時に、謀議の失敗があったとする。秘史にはこれに相当する記事がない。

親征録は2.7で述べたカラ・カルジトの戦いのことを、カランジ（合蘭只）の野の戦いと記し、この戦いとほとんど同じ表記である。集史の二つの戦場名もほとんど同じである。ひょっとして、同じ戦いで起きたことを別々に記載しているのか、との疑いが湧くが、表記を微妙に変えているところを見ると、別の戦いであると認識しているように思える。カラ・カルジトは特定地名ではなく、「ずっと続く不毛の土地」のような一般地名のようであるから、二つの微妙な違いは方言程度の差であろうか。実際、最初の戦いの時だとすると、センゲンが傷ついたとは言え、テムジンは追い払われてケレイト優勢だったのだから、アルタンらがオン・カンを殺害しようとした理由が思い浮かばない。もしも、その時にアルタンらが逃げていたとすれば、テムジンが詰問役を送ることも出来なかったはずである。更に、そこから逃げる方向が西夏方向なら分かるが、タヤン・カン方向としているのも理解に苦しむ。従って、この戦いは、先の戦いとは別であったと判断する。

考えられるのは、オン・カン本人が攻めてきたのではなく、別軍による攻撃だったとすることである。オン・カン軍はカラ・カルジトの戦いで砂漠の向こうへテムジンを追いやったが、テムジン

がウルクイ・シルケルジト地方を目指しているとは知らなかったはずだ。バルーン・ウルトから再び北上してケルレン河行程に現れてくる可能性も考えられた。チョイバルサンまでのどこかに軍を置き、待ち構えていたとしても不思議ではない。使者のやりとりで、テムジンがトンゲ澤に居ることがはっきりしたので、その軍が攻めて来たとするなら理解できる。

バルジュナ湖に想定した地域の西には砂漠のように見える土地もある。そこがカランジン砂漠であろう。その戦いが始まる前か後に、再起を湖で誓い合っただとすれば、感動的な情景になるだろう。単なる通過地点だったとすれば「バルジュナの誓い」が喧伝されるようにならなかったと思う。

オン・カンの居場所がわざわざ書かれているのは、彼がこの戦場には居なかったことを表わしていると思う。オン・カン本人は傷ついた息子と本領に帰っていたので、その場所が、ジカンクルとかキトクルカト砂漠だったのだろう。オン・カンは、東方との連絡に都合の良いケレイト領の最東端、ベルケ砂漠に近い所に居たのではなかろうか。その辺りに、ジカンクルあるいはキトクルカトとか言う砂漠があったと考える。

オン・カン殺害計画が起きたのは、アルタンらがオン・カンに見切りをつけたからだ。そういうことが起きる可能性の一つ目は詰問使が来た後である。アルタンらは、テムジンに砂漠の向こうに追いやったので、いずれ軍団として崩壊するとでも思っていたのだろう。だが、又現れて、正々堂々たる反論をしてくるテムジンの気迫と、1,000km を越える逃避行の間、部下を統率し切った上に、コンギラト達も味方に付けた力量に驚愕したのだろう。親族であるという対等意識があつて、側にいた時には充分に分からなかったテムジンの能力の高さに改めて気づき、「しまった、エライやつを敵にした。裏切るのではなかった」との思いがよぎったとしても不思議ではない。テムジンに指摘されたように、この後のオン・カンの心変わりも大いに考えられた。オン・カンの首を土産にテムジンに詫びを入れようとでも思ったのかも知れない。浅はかな考えではある。彼らがナイマンに逃げたところを見ても、オン・カンはやはりケレイト領内にいたと考えられる。

2.12 テムジン、家族の元へ

集史は、1203年春にバルジュナ湖の苦水を飲み、秋に出発して、オノン河に部衆を集め、オン・カン相手の戦いに出たとする。

実際は初夏にトンゲ澤を出て、カランジン砂漠でケレイト軍を迎え撃ち、夏の終わりにコレン湖の西岸を経て、オノン河中流域の旧タイチュート領から家族の元に向かったと想像する。オノン河上流域で家族と再会したはずだ。別れてから数か月ぶり、逃走距離約 2,000km の苦難に満ちた旅は一応終わった。互いにさぞうれしかっただろう。その位置は、恐らくチンギス・カン生誕地とされるダダル近くである。というのは、テムジンが生まれた時も男達が戦いに出て防備が薄くなっていたので、ホエルン達はそこに集合して安全を図っていた。いわばキヤト氏族の避難場所であったからである。カバカルーカルタルカンを目指して行け、とあるのはダダルとオノン河を挟んで東にあるエレーンリー (Ereenly) 山系のことと推察する。現在はオノン・バルジ国立公園になっている。

2.13 奇襲への準備

テムジンが家族に再会したものの、正攻法ではケレイト勢に勝てない。この状況が長引けばじり貧になる。ケレイト中枢部を撃破する以外に状況を転換できないが、ケレイト部族の奥深くにオン・カンらがいれば近づくのも難しい。ともあれ、二人がどこに居るかを知らなければならない。そこで、妻子をオン・カン陣営に残していたカサルが、「兄にも会えないので、反省して再びそちらに行きたい」と偽りの主旨の使者を立て、オン・カンに接触することにした。使者がオン・カンとセングンに会ったのは、2.3 で示したジェジェル丘だった。オン・カンは使者をカサルの使者に付けて送り出し、カサル本人に会ってその真意を確かめることにした。だが、その使者がケルレン河のアルカル・ゲウギに着いてみると、カサルの部衆とは思えないほど多くの人があった。テムジン軍だったことに気づいて逃げようとしたが、馬を射られて捕まりカサルに処分された。

秘史では、カサルがバルジュナ湖にやって来た直後にこの計画を行ったとするが、それはあり得ない。いくらテムジンでも、裏切っていた弟を再び信頼するには少しの時間を要したはずだからである。他書のように、家族に会って、落ち着いてからのことである。

アルカル・ゲウギはどこであろう。アルカルとは現代でも乾燥した牛糞のことである。燃料にするために地面から拾う熊手状のものがゲウギで、下図に示した(1)。五本ある熊手状の物の先は曲がっていないから、地面に落ちている乾燥した牛糞を突き刺して背負った籠に拾い入れるものだろう。即ち、放射状の形が特徴的なケルレン河の一部分か、河のすぐ近くにあるそのような地形を指しているのだろう。こう考えると、今まで述べた中にふさわしい土地があった。2.4 で述べた、ツァガン・エルギーン・ジサという場所である。

図6 アルカル・ゲウギ候補地

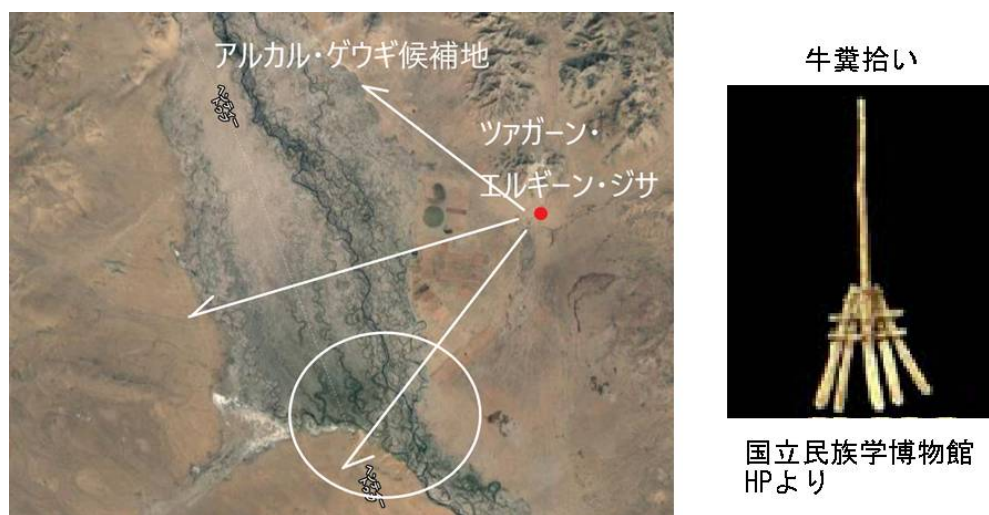


図6の白丸で囲んだところを南東方向から見ると幾本かある河の流れが放射状に広がり、ゲウギの形をしている。ケルレン河のこのような地形の所はここ以外にない。また、アブジア・コデグリからツァガン・エルギーン・ジサにやって来て、ケルレン河方向を見ると、図の白線以外にも放射状に広がる幾本もの通行痕が見える。両方の地形から、ツァガン・エルギーン・ジサの辺りが

アルカル・ゲウギと呼ばれたのではなからうか。この事態に至る重大な方向転換が行われたムンリクの家があったところが、この局面において再び重要な場所となったのである。

アルカル・ゲウギからジェジェル丘まで、現在の街道で約 130km ある。バダイとキシリクのように一晩でも走り通せないことはないが、着いても人馬共に疲れ果てて戦闘力がなくなる。最低でも 2 日掛けて進む必要があるだろう。通常のサーリ・ケール経由の街道をつかえば平地を多く通るので行動の秘匿性が落ちる。図 7 のように、目立ちにくいケルレン河の谷間を遡る道を進んだのではなからうか。ただ、馬に枚を衝ませての行軍だし、足場も良くないだろうから、それほど早く進めない。黄丸のあたりまで 2 日ほど要したかもしれない。そこで休んでから、サーリ・ケール北部の平地を横断してジェジェル丘までは約 65km、見つかる可能性が高くなるので、この行程は一気の夜行軍だっただろう。行動を知られ難くするために兵数はそれほど多くなかったと想像する。少し遅れて後続軍も向かっただろう。

図 7 テムジンの奇襲路想定図



2.14 ジェジェル丘での戦い

テムジン軍は、ジェジェル丘のジェル狭間にいたオン・カン軍を攻めた。秘史は三日三晩包囲したが、オン・カンとセングンはいつの間にか脱出したとある。他の史書は、オン・カンを破り、ケレイト部衆を下したと極めて簡単な記述である。

テムジン軍は明け方に到着しただろう。奇襲した側に状況は圧倒的に有利なので、ここでの戦闘の決着は簡単に付いたはずだ。ジェジェル丘付近は確かに狭い地形だが、秘史のような三日三晩の包囲戦が出来るとは思わない。城塞のような所に敵が籠るか、崖のように両側がそびえている地形の場所に敵を封じ込めることができない限り、包囲戦はできない。包囲したとしても、周囲に居る敵方は危機に直ぐ気づくはずだ。彼らがやって来てテムジン軍の背後を襲えば、囲みは簡単に破れる。部下の頑張りでも退路を確保して、オン・カンとセングンは脱出したと思われる。テムジン軍はジェジェル丘まで無理な夜間行軍をしてきたので、オン・カンを追い払い、そこに居た敵の兵士を

収めるのに精一杯だったと思われる。オン・カンたちは当然本拠地であるカラ・トン方向に逃げたはずであり、そこまで70kmほどのどこかに自軍の頼りになる将官がいて、反撃に移るということはあったと思う。テムジン方の進撃速度次第では、数に勝るオン・カンの逆襲も考えられないでもない。ケレイト領の西の端を契丹三城のあった付近までと考えれば、ジェジェル丘から200kmはある。戦いはいくつかあり、テムジンはそれらを解決していったはずだ。

もしも、秘史の言うような三日三晩の戦闘があったとするならば、それはジェジェル丘ではなく、クイテンの戦いで用いたアラン塞、現ウラン・ヘレム遺跡にオン・カン軍が立て籠もった時以外に考えられない。それはオン・カンとの最後の戦いだったはずだ。オン・カンとセングンがいつの間にか塞から脱出したというのは、自らオン・カンに手を掛けたくないテムジンがわざと逃がしたのだ。武士の情けである。事ここに至って、老齢のオン・カンではもはや巻き返しが出来ず、セングンには衆望が無いことを見越しての措置である。秘史は、最初のジェジェル丘の戦いと、最後のアラン塞の戦いの結果をまとめて記述し、この戦い全体を表わしたのかも知れない。

不思議なのは、どの史書でもこの戦いでモンゴルとケレイトの力関係が一気に逆転し、テムジンの制覇がなったとしていることである。しかし、小部族が大部族のケレイトを直ぐに飲み込んだとするのは考えにくい。それにはケレイト部族内部からの協力が絶対に必要である。容易に想像が付くように、オン・カンと不仲になってナイマンに逃げているジャア・ガンボが、この度の騒動を知って帰って来ていたか、あるいはテムジンに呼び寄せられていて助力したとしか思えない。オン・カンとセングンを逃亡させた後、彼自身がケレイトのカンになろうとしたならば、テムジンは止めなかったであろう。でも彼は自分の能力では無理だとして、部族をテムジンに任せたのに違いない。ケレイトの武将も多く居ただろうが、彼らは、テムジンがケレイトに尽くしてきた実績を良く分かっていたし、今まで共同で何度も戦ってきて、その人となりとも能力も分かっていた。逃亡中の行動も、最後のジェジェル丘の戦いも敵ながら見事だったから、争う気持ちはなかったのだろう。ジャア・ガンボの娘を、テムジンとその息子達が娶って、モンゴルはケレイトを吸収合併した。

2.15 オン・カンとセングンの逃亡

オン・カンはナイマン部族の辺将に見つかり殺された。セングンは父と別れ、盗賊暮らしをしながら西夏を経て、天山南路を西に進み、亀茲（今の庫車）で殺されたらしい。

3. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全訳、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1，2，3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)，商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考資料>

(1) https://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/staff/konagaya/qtvr/01_00

以上

改訂履歴

2020年9月22日 初版